

『冊封使行列図』から博物館における学びを考える

里井 洋一

Thinking about learning in museums from the Sakuhoshi procession

Yoichi SATOI

沖縄県立博物館・美術館, 博物館紀要 第18号別刷

2025年3月14日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.18

March, 2025

## 『冊封使行列図』から博物館における学びを考える

里井 洋一<sup>1)</sup>

Thinking about learning in museums from the Sakuhoshi procession

Yoichi SATOI<sup>1)</sup>

### 1 はじめに

沖縄県立博物館には沖縄県指定文化財『冊封使行列図』（以下「行列図」）が展示されている。しかし「行列図」の研究は乏しい。

絵に描かれた具体一つ一つを読み込むという誰でもできる行為によって「冊封使行列」の真実に近づいていく。

「行列図」は長さが22メートルもある巻物で、600人余の「行列図」である。

「行列図」は、沖縄県立博物館が購入したもののだが、購入年が1966年とわかるだけで、その来歴に関しては残念ながら記録簿には記されていない。そのこともあって、誰がどのような意図で「行列図」を製作したものかはよくわからない。絵そのものを読み取り数々の問いを持つことによって、この絵の真実に近づいていけることがこの図の魅力であるとも言える。

富島壮英は絵を読み取る作業を行い、この図が



図1

1756年の尚穆王の冊封使全魁の行列だと推論した<sup>1)</sup>。この推論は、その後の研究者たちも継承している。

この絵が冊封使行列と言われるのは絵の中に、左にみるように「冊封正使」と書かれた牌があることにある（図1）。「冊封正使」は



図2

この轎に乗った二人の内のどちらかで、どちらかが副使と思われる。二人とも清朝時代の同じ官

服に、図に2みるように、二人の胸元には補子（模様）があり、二人とも麒麟である。区別がつかない。1719年の尚敬の冊封使以後に任命された正使・副使ともに一等官の官服麟蟒服を皇帝から与えられたからであるが、なぜか顔もそっくりに描かれている<sup>2)</sup>。

また、図3にみるように「翰林院侍講」という牌も出てくる。相方の牌は裏向いていて見えないが牌は通常対になっているので、「翰林院侍講」と記されていると思われる。翰林院侍講の冊封使は、清朝が派遣した冊封使中、全魁ただ一人である。このことから、この冊封使「行列図」は、1756年の尚穆王の冊封の絵であると考えられてきた<sup>3)</sup>。



図3

では、副使の牌がセットで当然あるはずである。先行研究はそのことに触れない。「翰林院侍講」の

<sup>1)</sup> 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

<sup>2)</sup> 富島壮英『『冊封使行列図』解説』（『新琉球史 近世編上』346頁、1989年）

<sup>3)</sup> 『冊封使行列圖』解説（台湾 國立故宮博物院 2016年2月）

<sup>2)</sup> 李鼎元『使琉球記』（那覇市史史料編第1巻3冊封使録関係資料（原文編）225頁）

牌の後ろに牌（図4）が続く。副使を示す牌なのかもしれない。こちらは対で「賜進士第」と記されて



図4

いる。

進士第とは、進士となった人の屋敷をいう<sup>4</sup>。屋敷の下賜を、副使を暗示する牌にするであろうか。疑問である。

「賜進士及第」は、科挙合格の最高峰一甲三人のことを指す。この牌は「賜進士及第」を示すのではないだろうか。「賜進士及第」を与えられたのは、正使では尚温王の趙文楷と尚育王の林鴻年である。二人とも科挙一

位の状元であった。副使では尚敬王の徐葆光で、第三位の探花であった。「賜進士第」が徐葆光であるならば、この行列は1719年の可能性もあるのかもしれない。

そこで、皇帝に成り代わって冊封使が琉球中山王

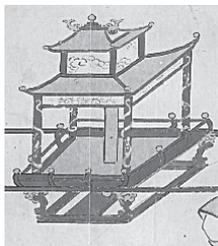


図5

に認証する証となるのものが、「行列図」ではどのように運ばれているかみてみよう。図5は龍亭と呼ばれるもので、冊封使が皇帝の使者であることを証明する節と思われるものが鎮座している。

この後に続く図6の龍亭には皇帝が琉球王に任命する詔勅が乗っていると思われる。一通は詔、一通は勅と思われる。

最後の龍亭には皇帝が王に与えた印が乗っていると思われるが、図7にみるように大きな袋

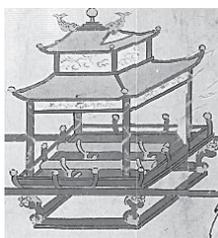


図6

であるところが気になる点である。

この後ろに綵亭が図8のように2台続く。1台の彩亭には、琉球王に与えた絹織物、もう1台には王妃に与えた絹織物が乗せられている。

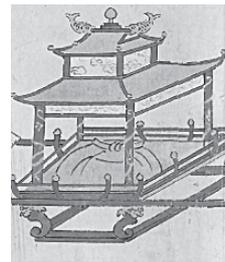


図7

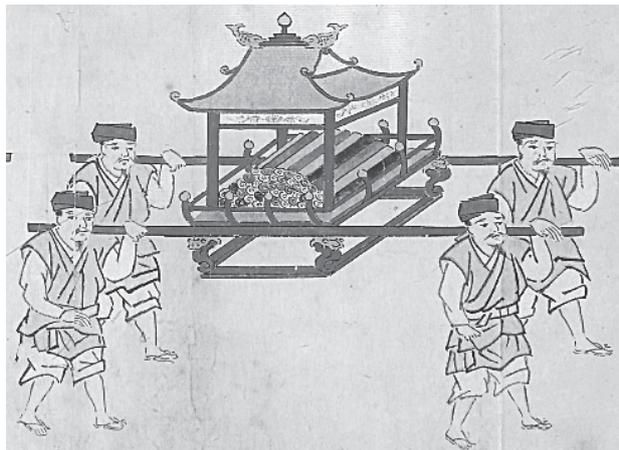


図8

1756年の尚穆王の冊封副使である周煌が著した「琉球国志略」巻11中「冊封礼」には、冊封の朝「龍亭三座、彩亭二座」を備え、正使が節、副使が詔勅、随行官が印を捧げ龍亭に安置し、捧幣官が緞疋を左右の彩亭に捧げ置いたと記されている。

1719年の尚敬王の副使徐葆光「中山傳信録」には、龍亭に詔勅、捧幣官が緞疋を左右の彩亭に分置したとある<sup>5</sup>。この時の冊封の図冊である「冊封全図」中「封船到港図」には、龍亭もしくは彩亭が描かれているが五座ではなく三座である<sup>6</sup>。

また、1800年の尚温王の副使李鼎元「使琉球記」では、龍亭は五座（詔、勅、御書、諭祭文、節）、彩亭は四座（賜幣、焚帛、鼓吹、儀衛）と記されている<sup>7</sup>。なお、龍亭・彩亭は琉球で準備されていたとされ、その様子は「冊封全図」の「封船到港図」でお迎えの琉球側役人たちの側に龍亭・彩亭がある

<sup>4</sup> 台湾新竹市鄭用錫邸、澎湖縣蔡廷蘭邸 中国安徽省黃村邸 江西省江之紀等

<sup>5</sup> 徐葆光「中山傳信録」（那覇市史史料編第1巻3冊封使録関係資料（原文編）96頁）

<sup>6</sup> 『琉球冊封全図—1719年の御取り持ち—』12頁、2020年。

<sup>7</sup> 李鼎元「使琉球記」（那覇市史史料編第1巻3冊封使録関係資料（原文編）236頁）

ことから確認できる。

龍亭・彩亭の数から、「行列図」は富島が唱えたように1756年の冊封を描いた蓋然性が高いと言えよう。

なお、図8にみるように、冊封前にも関わらず、琉球側の赤冠<sup>8</sup>が龍亭・彩亭を運んでいる。これは琉球側の三司官が冊封当日の朝、天使館に迎えに来て、龍亭を請う<sup>9</sup>という様式を取ったことによるものと考えることができる。

### 行列の先頭は王舅・三司官の権威標章？

「行列図」は 図と対話するという行為によって研究に参加しやすいという特徴をもつ。その特性を生かして、沖縄の歴史に関心をもっている中学校社会科の先生方に、「行列図」全体をみて考えてもらった。

「行列図」は、誰を意識して作られたと考えるのかと発問し、選択肢から、誰かを選んで、理由を書くようにお願いをした<sup>10</sup>。

- 1, 那覇や首里の人々
- 2, 薩摩から派遣されてきている人々
- 3, 王をはじめ琉球王国を支配する人々
- 4, 上記以外の誰誰

中学校の先生から出た意見をもとに、様々な解釈や意味ある学びをいくつか紹介する。

先頭の馬に乗った2人の役人には轡をとる従者が2人もつき、傘を持つ従者、その後ろを歩く黄冠下僚が1人、赤冠下僚が6人もいて、その後を若者が歩き、ふろしき包・はさみ箱・赤板をもつ従者3人



図9

がいる。一人に14人も付き従っている。清から派遣されてきた使節の中に、冊封正副使以外のものにはこのように多様な従者たちは描かれていない(図9)。

このことから、中学校の先生からは「清よりも琉球の役人が偉いことを示すものかもしれない」「首里や那覇の琉球の民への支配者としてアピールになっている」という意見が上がった。

1866年の尚泰冊封で天使館を出発する行列の順番を示した「丙寅冊封當日之御禮式考 卷之八 (久米村方)」(以下「御禮式考」)という尚家の資料がある。

この文書は琉球国王家である尚家に伝わった古文書の一つで、先頭から二列にならんでいる。

先頭に久米村の秀才2人、通事2人、親雲上2人が順にならび「引札」、すなわち号令を担当し、その後二列で、筑登之が16人、親雲上が16人。勢頭座が2人、当座が2人、座敷が14人、中議大夫が2人、吟味役が2人、申口が2人、親方が10人と続き、王舅と三司官が並んで王府家臣団74人の行列は終わる。史料には王舅と三司官の横に「以上騎馬」と記されている。

一方「行列図」では、先頭は図9の通りである。先頭の騎乗の二人は、三司官のような高官ではないかと考えられる。先に述べたようにこの先頭集団は高官に先導された下僚と従者30人である。

1756年の冊封使「行列図」の先頭は王府高官の権威を示しているが、1866年の「御禮式考」の先頭は琉球家臣団の階層順を示す尚泰冊封行列で、その相違は明白である。

王舅・三司官の権威を冊封使行列に埋め込んだ絵を送ることは、中国もしくは日本との外交において一定の有効性があると琉球王府官僚は認識していたのかもしれない。

### 武器が描かれていることの意味

「行列図」には、琉球王府に多くの武器が描かれている。鉄炮(石火矢)があり、槍などの武器もあ

<sup>8</sup> 「丙寅冊封當日之御禮式考 卷之八 (久米村方)」には家来赤頭が龍亭・彩亭を持つとある。

<sup>9</sup> 前掲 徐葆光「中山傳信録」

<sup>10</sup> 沖縄県、中学校社会科研究会大会講演(2024年6月27日)、ともかぜ振興会館

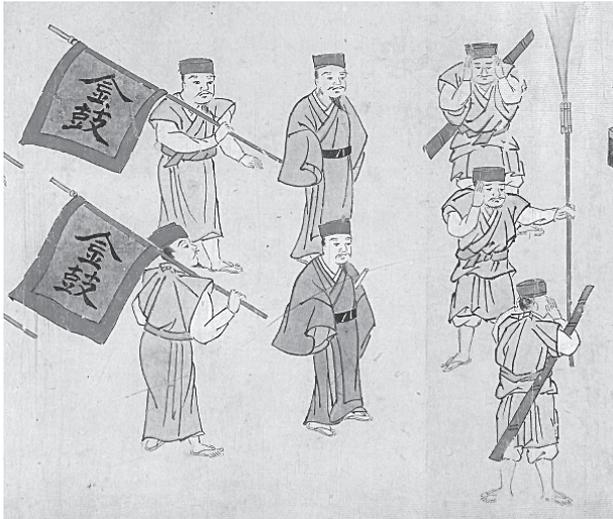


図10

る。中国に対して、琉球は冊封使を守護しているために、この絵を描かせたのだという意見があった。

図10は図9のすぐ後の絵である。赤冠が琉棒火矢を発射し、左右の緑冠が耳を閉じている。すごい音であることがわかる。

「御禮式考」には、王舅・三司官の後に唐御飾道具 唐吹鞞 琉棒火矢 平等所筑佐事引鞞 螺赤頭 金鼓旗 と記されている。図10では緑冠が唐吹鞞を持ち、赤冠の平等所筑佐事が引鞞を腰に差し、螺赤頭が金鼓旗を掲げているように見える。

「御禮式考」では金鼓旗の後ろに棒・鎗・斧・路地楽等24人の行列が続き、龍亭に繋いでいる。

ところが、「行列図」では様相が異なる。

図11に見るように引馬の後に路地楽が始まり、また引き馬が続く。この二頭の馬は正副使の乗馬な



図11

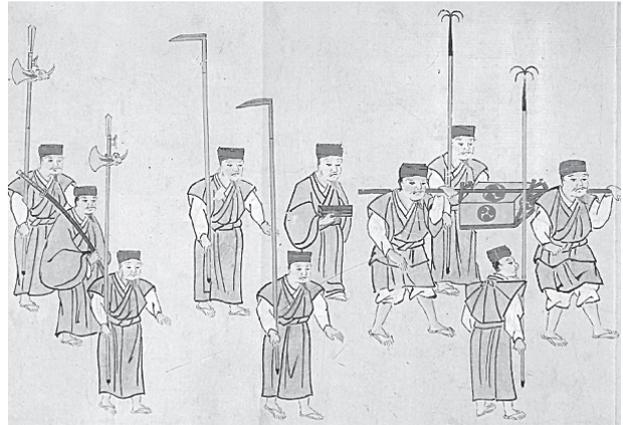


図12

のかもしれない。

さらに、旗四種類8本が続き、赤い涼傘の後に、赤棒4本、突棒1本・刺又・袖搦2本と捕方道具が続き、王家紋章の黄箱を囲むように袖搦2本、大鎌2本、太刀1本(図12)、さらに戦斧2本。槍6本王家紋章の黒箱を囲むように槍2本、槍6本が続く(図13)。黄箱と黒箱を守るために44人が備えられている。

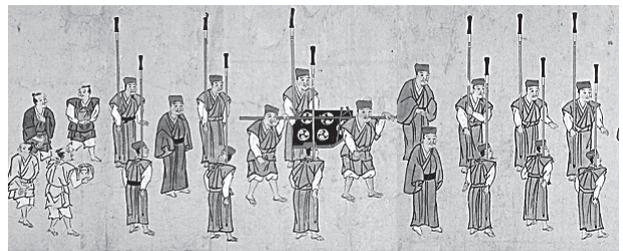


図13

1613年、薩摩は兵具改で鉄砲の所持を禁じるが、王子・三司官・侍衆の自分の持具(武具)を認めている<sup>11</sup>。また、進貢船は、大砲・鉄砲は薩摩在番奉行の管理下で、火器を所持することが認可され拡大されていった<sup>12</sup>。また、進貢船の乗員は、刀・脇差を携帯していたことがわかっている<sup>13</sup>。

1776(乾隆41)年に浙江省に漂着した宮古島の上納船からは、「腰刀十把、鎗一桿」が発見され押収された。清朝側は所持理由について問いただした

<sup>11</sup> 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』1049号、1984年

<sup>12</sup> 麻生伸一「琉球における薩摩藩の武具統制令について」(『沖縄文化41-2』49～57頁、2007)

<sup>13</sup> 「子之秋走大清国江為御返船指渡私物帳」(『琉球資料(下)』『那覇市史』史料篇第一巻11、25頁、1991年)

ところ、「賊盗を防ぐ」ためだと供述し、返還を求めたところ、返還を許可している<sup>14</sup>。渡辺美季は「軍器は海賊を防御する必要性から、東洋南洋を航海する大船のみ一定の範囲内で携帯することが許されており、それがこの事例にも適応された可能性はある」と述べる<sup>15</sup>。

「冊封全図」中「肩輿・馬、には、槍や刀をもつ従者と、石垣に槍が2本、のせかけられている絵が描かれている<sup>16</sup>。

また、1736年の親見世日記9月29日の条に、渡地村仲村渠等が刀を振り回す事例が記されている<sup>17</sup>。

これらのことから、権威の象徴すなわち佐事などの下級役人や三司官等の官僚の従者という枠組みを超えて、彼らが日常住む自宅においても刀等を所持する文化が琉球にあったと考えられる。同様に、宮古・八重山の頭たちが年貢をもって沖縄に行き来する時にも、頭の権威の象徴「儀仗」としての武器をもってきていたのではないかと考える。

「行列図」に即して言えば、守護するものの核として、王家の紋様のついた黄箱と黒箱があり、その前座として路地樂が奏でられていたとも捉えることができる。

#### 下僚・従者を従える官僚たち

44人の守護集団の後ろには、従者をしたがえる二列で官僚たちが続いている。

先頭の赤冠（騎馬）には従者が4人（ふろしき包）、次の黄冠（騎馬）には従者が6人（ふろしき包・傘・赤板）、従者はそれぞれ異なる色のお仕着せをまとっている（図14）。同様の黄冠（騎馬）集団が



図14



図15

8組、全部で10組が二列で連なっている。最後の1人の黄冠だけは従者が5人である。

次に続くのが、紫冠と思われる官僚が2組（騎馬・一人はキセルを吸っている）赤冠3人の下僚と従者（ふろしき包・傘・赤板・はさみ箱）が6人である（図15）。この組み合わせが4組続き、全部で6組である。ただし、最後の組は従者が一人、若者が増えている。なお、下僚においても、組ごとに帯の色を異なっている。

最後に登場するのは、官僚2組である。黄冠の下僚が2人、赤冠の下僚が6人、従者が（ふろしき包・傘・赤板・はさみ箱・若者）が7人である。計16人で先頭の官僚集団よりも黄冠一人分が多い（図16）。



図16

「御禮式考」では、順番に階層ごとに並び、最後に王舅・三司官が登場する。それから類推すると、この二人は王舅・三司官なのかもしれない。

官僚と下僚・従者の集団は77人である。この数は1866年の尚泰冊封「御禮式考」の家臣団行列74

<sup>14</sup> 「清代中琉関係档案選編」北京：中華書局、1993、179-180頁。

<sup>15</sup> 渡辺美季「清代中国における漂着民の処置と琉球（2）」（『南島史学55号』41頁、2000年）

<sup>16</sup> 『琉球冊封全図—1719年の御取り持ち—』36頁

<sup>17</sup> 国立台湾大学図書館典蔵『琉球関係資料集成第一巻』252～253頁（乾隆元年 親見世日記）



図17

人に匹敵する。

### 琉球の護衛と清朝の騎馬隊。

冊封使を守るため、先頭の武官の指揮のもと、清朝から騎馬軍団が使われている。琉球王国は清朝と深い関係にあることを、薩摩に認識させるためにこの絵が描かれたという意見もあった。

官僚と下僚・従者の集団行列までは、どうも冊封使を守る体制ではなく、王権とその家臣団の儀仗、権威を見せるための要素が強かった。この後ろからようやく、冊封使のための行列が始まる。冊封使に至るまでに行列の様子をみてみよう。

黒朝に赤冠2人の後ろに槍が4本、次の黒朝赤冠2人の後ろに槍6本に囲まれて、揚琴（棒で打弦）、二鼓、管（縦笛・2人）、三板、雲鑼で音楽が奏でられている。黒朝に黄冠2人の後に、毛槍2本に挟まれ、赤涼傘をたなびかせ、十文字槍2本、白毛槍2本が続き、黒朝黄冠2人の後ろに王家家紋をつけた薙刀が4本続く（図17）。冊封使の前座としての琉球側の護衛である。「御禮式考」では、鎗や斧等



図18

をもった赤頭10人が護衛している。その後に路地衆が続く。図18にみる「行列図」とほぼ同規模である。

この後、冊封使に伴って清から来た人々の行列が続く。

図19は、皇帝から与えられた「粛静」一對と「廻避」



図19

一對の牌<sup>18</sup>を掲げている。彼らの服装は乗馬に裾の広がる清代のものである<sup>19</sup>が、帽子は、丸いシルクハットのように、清代の風俗図でもみない特異な装束である。このような装束を、「冊封琉球全図」封船到港図・諭祭儀注<sup>20</sup>や『奉使琉球図』福州登舟」中（図20）にみることができる。「行列図」



図20

冊封正副使の轎を担いでいる16

人は同様の装束である。徐葆光「冊封琉球全図」諭祭儀図中の轎の周りの人々も同様の装束のように思

われる。徐葆光「中山伝信録」には、海防廳が用意した人々の中に轎傘夫がいる<sup>21</sup>。海防廳とは福州海防廳のことであり、そのトップは海防同治で、福州の沿海防備とともに琉球進貢の窓口でもあったという<sup>22</sup>。

「粛静」・「廻避」の後に、「欽命冊封正使」の牌が2対（4人）先述の「翰林院待講」1

<sup>18</sup> 李鼎元「使琉球記」（那覇市史史料編第1巻3冊冊封使録関係資料（原文編）226頁）

<sup>19</sup> 東京国立博物館 学芸研究部調査研究課長・日本東洋染織史研究の小山弓弦葉さんから教えていただいた。

<sup>20</sup> 『琉球冊封全図－1719年の御取り持ち－』12・16頁

<sup>21</sup> 徐葆光「中山伝信録」前掲76頁。

<sup>22</sup> 山田浩世「福州府海防庁衙門」（『中国福建省における琉球関係史跡調査報告書』145～148頁、2009年。）



図21

対(2人)「賜進士第」1対(2人)の牌が続き、「清道」旗一対(2人)、「翰林院」小旗一対(2人)、「御杖<sup>23</sup>」一対(2人)、「欽命冊封」小旗一対(2人)、「欽差」小旗一対(2人)と儀仗22人の行列が続く。

この後、長刀を持った異なる帽子の4人が続く(図21)。

続いて、「巡視」旗一対(2人)、「瑞雲神仙」旗一対(2人)、「虎」旗一対(2人)、「三本足龍」旗一対(2人)「瑞雲」旗一対(2人)の後ろに「龍旗」を持った騎馬の武官が現れる(図22)。この10人の旗行列は清朝兵(儀仗)出現の前段と考えられる。

続いて「長刀」一対(2人)「斧」一対(2人)「半月」一対(2人)、「玉鎖」二対(4人)、「鞭」二対(4人)、武器をもった唐人14人がいる(図22)。

この後に20騎の清朝騎馬隊が続く(図23)。刀を持ち、どうどうたる騎馬隊である。ある中学校の先生が言うように琉球王府のバックには清朝があるという事実を薩摩や日本の人々にアピールするというメッセージであるのかもしれない。



図22



図23

## 馬場と琉球競馬

この騎馬軍団が乗る馬たちは、清から運んできたのであろうか？

琉球国王家の古文書の一つに、1866年の冊封の記録である「馬当方久米村公事帳」という資料がある。

1838年尚育冊封の前例に基づき、久米村人3人、久米村に住むが唐系でない島中人3人を馬当に任命し、冊封使に関する馬の担当者にしたとある。

その上で下記資料にみるように、馬150疋を沖縄の各村から調達するようという命令を首里王府は出している。

### 一乗馬百五拾疋形共

但木札寄糸緒付、何間切何村何某馬方相記、見苦敷無之、馬道具無曲馬、大さはくりニ而能々見調部、壹ケ間切さはくり文子之間式人ツゞ率領ニ而性成馬形相付

右 勅使様御入津之時御用冠船走出候ハ、無遅々唐船堀辺江寄せ馬当方引合候様、尤二号船も同日御入津仕候ハ、百疋相重都合式百五拾疋、右同断寄申様被仰付可被下候、若二号船後立而御入津仕候ハ、重百疋者寄ニ及不申旨兼而印紙相済取納座江相届候事

<sup>23</sup> 李鼎元「使琉球記」(前掲)には皇帝の命によって工部から受け取ったものとして御杖一対とある。

冒頭 馬150匹に馬形、すなわち馬を世話するものも一緒に要件を述べ、木札に、どこの間切・村・誰の馬なのかを書き記し、見苦しくない馬道具を持たせ、曲馬ではないように、大きばくり（間切役人）が調査して、間切のさばくりと文子の中から二人が責任者として、馬には馬形をつけることという。

二号船が到着したならば、さらに百匹追加で合計250匹を各間切から調達せよと指示している。

さらに馬形の職務を次のように規定している。

一唐人馬形之者共、随分唐人江相隨面形を見知、兵之者共駆走候砌、追行不罷成、後先相成候共、道中氣を付、唐人失脚物見付候ハ、拾取座元江相届候事

右ヶ条之通、御規式毎、惣唐人乗馬出達有之、或者馬形之者共中途方致欠落、或者失却物有之、兵之者共座元江走入理不尽可致打擲方為及難渋由候間、無左様諸間切江堅被仰付度旨、兼而御構之御物奉行印紙相濟取納座元江相届候事

馬形の者は、唐人に従い、その面貌を記憶し、兵（騎馬）が駆走したら追いかけることが難しいので、後先になってもいいから、唐人の失脚物を拾い取り、座元（宿泊先）へ届けることと規定している。そうする理由として、馬形が途中で欠落し、失脚物があった、理不尽な打擲があり困ったことになるからであるという。

間切から馬を選出された馬形は間切役人から強く上記の件を言い渡されている。

最大250匹の馬とそれを世話する馬形が、冊封使が来た時には動員されたことになる。

徐葆光は「中山伝信録」6巻の中で、琉球の馬を、「蹠躩トシテ行クヲ善クシ、山路崎嶇ニシテ、沙磧中ヲ上下するモ顛蹶ヲ見ズ、此レ則チ其ノ習フ所ナレバナリ。山ヲ上リ水を渉ルニハ則チ馳ス」と評している。蹠躩すなわち、小さな歩幅であるくことを

得意とし、峻厳な山道でも、砂石があるところでもつまずき倒れることなく、山でも水辺でも駆けることができるのは、人が教えたからだという。

蹠躩（しょうちょう dié xiè）は、小股であるくことをいう。図23にみるように右前脚と右後脚、左前脚と左後脚を同時に動かす「側対歩」という足運び言っていると思われる。鞍の上に水を入れた茶碗をおいても一滴も落とさない「側対歩」が美しさを争う琉球競馬のポイントだという<sup>24</sup>。

図24は、当館所蔵「琉球風俗図」である。唐芋を馬が背負って運ぶ様を描いている。足並みは確かに「側対歩」である。美しさだけでなく、労働馬としても役にたつこと



図24

を示している。まさに、

このような馬にするのは、人によってなされたと徐葆光は考えている。その教育を競う場所として、琉球各地に「馬場」が設置された。梅崎晴光は沖縄県全域で150を超えていたという<sup>25</sup>。

1837年尚育冊封使の時、正使林鴻年、副使高人鑑等高官の御馬佐事に任じられた百姓に関する次のような資料がある<sup>26</sup>。

覚

勅使様御馬佐事中城間切島袋村赤頭喜納仁屋弟  
御札歳四拾貳 　　かめ喜納  
同真和志間切安里村高良筑登之親雲上男子御札  
歳三拾六 　　かめ高良  
副将<sup>27</sup>馬佐事同間切牧志村高良筑登之親雲上男  
子御札歳三拾六 　　かめ高良  
参将<sup>28</sup>馬佐事豊見城間切長堂村御札歳三拾四  
　　やまと大城

<sup>24</sup> 梅崎晴光『消えた琉球競馬 幻の名馬「ヒコーキ」を追いかけて』26～27頁、2012年

<sup>25</sup> 梅崎前掲書 12頁。

<sup>26</sup> 尚家文書80 道光拾九年戌（1839）勅使様御別當方日記 全6～7丁目

<sup>27</sup> 遊撃謝國忠は、冊封正副使が一品を臨時的に与えられたと同様に、冊封琉球二品銜、副将相当与えられている。そのため副将と琉球側は認識していたと思われる。（楊世榮「中國最後出使琉球之護航水師在金門」（金門日報2024年10月12日）

<sup>28</sup> 都司蕭邦佑は三品銜、参将相当を臨時的に与えられている。（楊世榮「前掲書」）

弾圧官馬佐事同間切長堂村赤嶺筑登之男子長堂  
親雲上倅者御札歳三拾三 かな赤嶺

右御冠船御渡来ニ付

兩勅使様并副将参将弾圧官御馬佐事被仰付可被下候  
以上

戌四月五日、 仲程親雲上<sup>29</sup>

御馬佐事に選ばれたのは全て首里那覇以外の間切に住む百姓身分の者たちである。豊見城間切長堂村のかな赤嶺は 長堂親雲上の倅者すなわち下男と考えられる。彼らは美しい馬を育てたと王府に認識され、1837年4月同時に赤八巻の位を与える上申がなされている。

同じ月、千総の御馬佐事に中城間切津波村瀬名波筑登之従甥御札歳46呉屋にや 3人の把総の御馬佐事に、中城間切島袋村赤頭喜納にや従兄御札歳47まつ安座間・真和志間切牧志村嘉数筑登之親雲上甥孫御札歳38うし高良・高嶺間切国吉村前地頭仲間筑登之従弟御札歳33によく幸喜、が選出されている<sup>30</sup>。

島袋村赤頭喜納仁屋の家からは二人の馬佐事を輩出していることがわかる。馬佐事の年齢は30～40代で熟達するのに一定の時間がかかることを示している<sup>31</sup>。

その後、勅使から千惣までの御馬佐事6人は筑登之座敷、把総の馬佐事3人は赤八巻の位を与えるよう評定所筆者が上申している。

1837年4月19日、勅使様別当である松堂親雲上は間切の裁量に任せきれず、自分で冊封使一行に相応しい馬を探して、彼の自宅へ鞍をつけて、さばくりの宰領で、飼い主が馬を運んでくるよう手配をしている。手配をした馬は次の8頭である。

- 1、北谷間切勢久原居住花城里之子親雲上栗毛馬
- 2、具志頭間切新城村玉榮之安里 赤毛馬
- 3、玉城間切前川村帳内居住上地里之子鹿毛馬
- 4、中城間切當間村呉屋筑登之青毛
- 5、中城間切當間村稲福筑登之青毛
- 6、中城間切當間村はえ門の新垣 青毛

7、大里間切宮城村知念筑登之 青毛

8、西原間切我謝村宮平筑登之 赤毛

筑登之等の位を王府から与えられた者や居住すなわち田舎に住む士族身分のものたちの馬である。その馬と士族を含む馬主の宰領を6つの間切のさばくり、担当させたことになる。

薩摩に献上された「野国青毛」も、北谷から首里平良市場に野菜を運んで来た時、真喜屋という馬術家（御馬当真喜屋実継？）によって、素質を見込まれ調教されたという<sup>32</sup>。

1872年、鹿児島県から、尚泰藩王冊封の件で、琉球を訪れていた伊地知壯之丞と奈良原幸五郎は、1月21日の泊の湊原で、棧敷をこしらえた馬御見物に招待された<sup>33</sup>。5月1日奈良原は、帰国の時、持ち帰り用として御馬を買ったことを報告し、首里王府はそれまで、奈良原用にしていた馬は差し返し、買入馬の世話をしよう5月3日指示をしている<sup>34</sup>。

以上みるように、冊封使の騎馬隊の馬や薩摩献上馬は沖縄の村々で育てられていたことが分かる。それだけでなく、奈良原のように琉球の馬を買入、鹿児島に持ち帰る役人たちもいたと思われる。

### 冊封使の本隊

前述の20頭の騎馬隊の後に、一对の赤旗赤棒（2人）、「肅静」一对（2人）・「廻避」一对（2人）の牌、「玉鎖」一对（2人）と続き、黄涼傘（1人）が続く。ここまでは唐人である。その後ろに琉球の赤頭が続く。琉棒火矢が3人、黄色に赤縁旗が2人、路地楽が12人（銅鑼2人、うしぶら〈銅角〉2人、うまぶら〈喇叭〉2人、つおな〈噴响〉2人、鼓4人）、儀仗兵が10人（赤棒2人、槍2人、刺又2人、槍）と続き、二人の文官（鳥の補子）が、前述の龍亭・採亭の前を先導する（図25）。龍亭・採亭の後からは、赤涼傘の後に、武官（獣の補子）の後に騎馬兵が12騎、黄箱が2つ、赤涼傘が2つ、赤棒2人、槍2人、4人の官吏（補子？）の後に前述の正使・副使の轎が続く（図26）。

<sup>29</sup> 勅使様御別当

<sup>30</sup> 「勅使様御別當方日記 全」10から11丁目

<sup>31</sup> 「勅使様御別當方日記 全」50丁目

<sup>32</sup> 梅崎前掲書 97～113頁。「北谷村誌」の逸話引用。

<sup>33</sup> 尚家文書（412日記）

<sup>34</sup> 尚家文書（413日記）



図25

正使・副使の轎の後ろからは、槍10人、長刀10人、青旗10人、龍旗を持った騎馬が4騎（図27）、騎馬隊が46騎（図28・29）つづき、行列図はここで終わっている。

琉球王国の路地楽を中心とする儀仗隊は冊封使本隊の前座として配置され、その後に冊封使を守護するために派遣された本隊の行列が続いている。その数、82人である。派遣された将と兵は清・福建の

海軍、水師であった<sup>35</sup>。先に見たように、「御禮式考」では冊封正副使は騎馬で首里城に向かい、その後ろに唐人供奉（皆騎馬）とあり、最後に琉役（騎馬）で終わっている。沖縄の村々から集められた250頭余の「側対歩」の馬の勇姿が行列図にみることができ。この「行列図」にみるような馬の足並みの美しさを再現する努力が、「子ども国」を中心に現在積み重ねられている<sup>36</sup>。

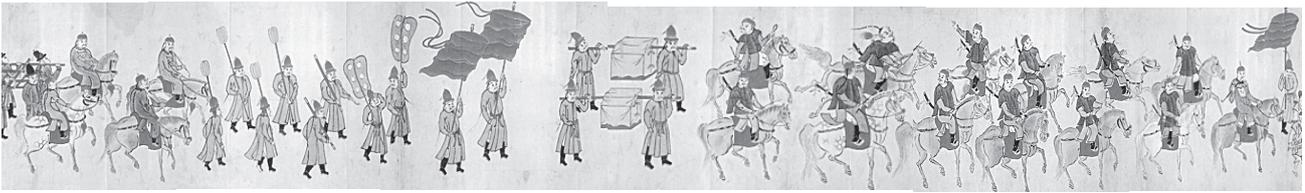


図26



図27



図28



図29

<sup>35</sup> 楊世榮「前掲書」、趙沂芬「保驾护航— 清代冊封琉球使臣的护航水師」徐斌・陳碩炫主編『守礼之邦— 中琉关系与亚洲文明— 第16届中琉历史关系国际学术会议论文集』2024年。

<sup>36</sup> 沖縄こどもの国『琉球競馬ンマハラシー実施報告書』2023年

\* <参考> 京都大学総合博物館『清國之琉球国王冊封使行列圖』は本館『行列図』と構図はほぼ同じで、本論図15より前が欠けている。京大図には、副使と記された牌があり、最後の騎馬武官が2人多い。（2025年1月30日調査）